○広島の復興の軌跡（第１３回）～被爆７０年企画～

戸板一枚、闇市から大手スーパーへ

～戦後復興に果たしたライバル経営者～

私の手元に写真集「立ち上がるヒロシマ　１９５２」がある。これは岩波書店発行の「岩波写真文庫」７２号、「広島―戦争と都市」（１９５２年８月６日発行）のために撮影されたネガフィルムのうち未発表の、建設中の平和記念資料館、原爆ドームとみやげ物屋、マーケットや繁華街の賑わいなどを掲載、原爆投下から７年経って復興に立ち上がる「広島」を生き生きと伝える写真集である。かつて「闇市」でにぎわった広島駅前は路面電車の発着場、いまでは見られないトレーラーバス、ボンネットバス、オート三輪タクシーなどが映っており、交通ターミナルとしての体裁を整えつつあることが伺える。また、駅の東側、現在急ピッチで再開発ビルの建設が進んでいるところには、「市場通」「駅前シネマ通商店街」などの看板が写っており曲がりなりにも食品、衣料品を扱う店を中心にした商店街らしきものが出現、賑わっている様子が捉えられている。

1946 年正月頃のヤミ市
（山端庸介撮影）

１９４５年８月６日、広島市内の商業活動は完全に壊滅したが、敗戦の日の３日後には早くも広島駅前、己斐、横川などに「闇市」といわれる露店の自由市場が出現したと云われている。その当時の模様を広島駅前で喫茶店「ムシカ」を経営していた梁川義雄はＲＣＣの被爆４０周年特別番組「瓦礫の中から～広島経済復興史～」の中で次のように″証言″している。

「…私がですね、ここ（駅前）へ出ましたのは、（昭和）２１年の５月頃ですね、まぁ今では想像もつかない、所謂道路で即席の戸板商売といいますか、リュックから物を出して売るとか、こういう原始的な、物々交換的な経済の交流でしたね。（当時は）統制経済でして、まぁ配給物以外はですね、一切自由販売できない時代でございました。それをこの駅前で自由に売買できるということになりますと、自ずから警察は見て見ぬふりをするし、場合によっては、手入れ日が決まれば申し訳に手入れをしておった、とこういうことですね」

１９４６年１０月のヤミ値は白米一升７０円、牛肉１００匁４０円、ビール一本５０円…、いずれも公定価格の数倍で飛ぶように売れた。闇市の購買力は戦後４ヶ月で当時の広島市の予算の倍以上の３，０００万円にも達したと云われている。

今年６月３０日、地場流通大手の㈱イズミは食品スーパーのユアーズに５０％超出資し、事実上子会社化することを発表、連結売上高は７０００億円規模になり、目標とする１兆円に一歩近づくことになる。

イズミの創業者、山西義政こそ、戸板商売から今日の流通大手にまで育てたその人である。今年９３歳になる山西は現在も会長として大所高所から経営に携わっている。

山西はＮＨＫの「歴史秘話ヒストリア」の第２１６回放送「幻の巨大戦艦　伊４００～極秘プロジェクトの真実～」で元乗組員としてインタビューを受けている。山西は「死」を覚悟して伊４００に機関兵として乗船したが、幸いにも特攻寸前に戦争が終わり、生き延びて広島に帰った。廃墟と化した街を一望できる広島駅前に立った山西は貧しく、ひもじい思いをした少年時代を原点に「生き抜くため」、戸板一枚に商品を並べて露天商を始めた。山西は「衣・食・住」のうち、まず「食」が一番渇望されていることから、友人の実家から貰い受けた「干し柿」を戸板に並べ商いを始めた。物々交換的な商いをするうちに、次第に「衣」への欲求が強まって

いることを実感、昼の商売を終えると夜行列車に飛び乗り大阪へ。衣料品を仕入れてトンボ帰りするなかで、戦後５年、１９５０年に衣料品卸の山西商店を設立、池田内閣による「所得倍増」政策が打ち出され高度経済成長の兆しが見え始めた１９６１年には広島市中心部にスーパーイズミ一号店を開業、その後中四国、九州に店舗展開し、今日を築いた。

スーパーイズミ１号店

１９８０年前後、大型店の進出に反対する運動が盛り上がったが、山西は社員に「わしは修羅場を何度も潜り抜けてきている、狼狽えるな！」と檄を飛ばしたと、聞いている。
山西が「永遠のライバル」と言って憚らないのが繊維卸の㈱十和（現：アスティ）とスーパーフジの創業者、尾山悦造である。戦中から衣料関係の仕事をしていた尾山は昭和２１年（１９４６年）９月、広島駅前に中古衣料のセリ市「五十（ごとう）会＝５と１０の付く日に市を開く」を組織する。その当時の模様を「広島経済復興史」で次のように″証言″している。

「…（広島は）第五師団と宇品を中心に運輸本部、被服支廠、糧秣支廠、兵器支廠と、所謂兵站基地じゃったんですね。戦後、これらのところにあった軍需物資を隠したというか、横穴の中へ、こりゃ戦後の人がやったんじゃない、戦時中におそらく横穴を掘ってこれへ入れとけとか、まぁそんなことをやったに違いない。それから呉、ここも海軍の兵站基地ですわ、あの海軍の軍需物資、これがたくさんあったわけで…、まぁ広島でそういうオークション（五十会）をやれば、物資が集まってくると思ったんですよ。わたしは戦前から似たようなことをやっていたものですから」

「五十の市へ行けば、なんでも出てくるということで、例えば北陸の方の織物産地からでも、絹織物などを腹に巻いて来るんですよ。関東方面からも持ってくるわけですが、仕立物はしつけがあったら新しいんじゃが、一晩着ても古着じゃけん。で、古着の証紙を付けて持ってきて軍需物資を持って帰るというバーターが起きるんですね。そのことが広まって、そこ（五十会）へ行けば特殊のものが手に入るということで、どっこもよそへ行きゃせんのんですよ、品が豊富なもんですから。朝九時から午後三時、四時までもセリよった。休憩時間は昼飯の三〇分ほど」

―競る人はどのくらいいたんですか？―

「そうですな、売る方が５０人くらい、買う方は４～５百人おりましたかな。買い手はぐるぐる入れ替わるんですよ。荷造りして帰りゃにゃいけんけぇ。ものすごい活気があった、あったよ」

私は尾山に何度か話を聞いたことがある。足が少し不自由であったが、そのハンディをものともせず、眼光鋭く、気迫に満ちた話をする人であったことを思い出す。
尾山は統制が緩む昭和２５年に繊維卸の十和織物㈱を設立、企業規模では山西商店を圧倒していた。しかし、スーパーマーケットへの進出では山西に後れを取る。イズミ１号店から６年後に対岸の松山市にフジを設立、四国での小型店舗の展開を余儀なくされた。その後広島へ進出するも現在の売上高は３１１９億円でイズミに大きく水をあけられている。
今は亡き尾山悦造は広島商工会議所副会頭に就いたが、山西義政は未だこうした類の公職に就いていない。（文中敬称略）

（編集委員　三宅恭次）

○広島の復興の軌跡（第１４回）～被爆７０年企画～

遅れた広島中心部繁華街の復興

中四国一の繁華街といわれる広島市中区の本通り界隈（胡通り・金座街・本通りの約１ｋｍ）は１日１０万人の買い物客や行き交う人で賑わいを見せている。

この一帯は江戸期、広島城下を横断する「西国街道」の一部で、通りには「革屋町」「平田屋町」「細工町」「播磨屋町」など当時の町名を刻した石板が埋められている。

写真左が下村時計店
（林重男撮影）

戦前も有数の繁華街だったこの一帯は１９４５年８月６日、爆心地から至近のところだったため、ほぼ壊滅状態になった。ランドマークだった下村時計店も１、２階が崩れ落ち、瀟洒（しょうしゃ）な時計塔は大きく傾き、無残な姿を晒（さら）した。

当時第五師団地区司令部の嘱託カメラマンだった岸田貢（後にキシダ写真館店主）は原爆投下による被災状況を克明に記録している。被爆直後の本通りの状況を岸田はＲＣＣ被爆４０周年特別番組「瓦礫の中から～広島経済復興史～」で「それはもう惨憺（さんたん）たるもので、もう、言葉では言い尽くせないですね、まぁ異臭も漂っていますしね。私が入って撮影したのが８月７日でございますが、その日の夕刻、帝国銀行（現アンデルセン）の横を通って、裏門で、水槽の中に女の子がつかっておりましてね、その中に死体が二つくらいあったりして…」と“証言”している。

「死の街」と化したところへ誰も帰ろうとしなかった。が、ようやく一か月後、本通りの世話役中山良一（中山楽器店）の呼びかけで安佐郡八木村（現：安佐南区八木）に家を持っていた林正夫（時宝堂）のところに約１０人が集まり、皆の無事を確認するとともに街の再建を話し合った。翌年の１９４６年、この時集まった人を中心に結成されたのが草分会（広島本通商店街復興発起人会）である。草分会は焼跡の遺骨の収集、瓦礫の整理から本通りの再建に取り掛かった。その当時のリーダーだった中山は被爆４０周年時にはすでになく、息子の彰が本通復興事務所のことについて次のように語っている。

昭和 24 年の本通り商店街
（佐々木雄一郎撮影）

「(父が）住宅営団に６畳一間の筵を敷いた家を建ててもらって、そこを（本通りの）連絡場所にしました。本通り最初の家ですね。周りには家一軒ないものですから、風は吹き抜け、夜は野犬が人骨を食べているもんですから、うっかり外へも出れないという、どん底生活をしたわけです。しかし、ここがあったものですから、疎開された方、生き残った方、親戚の方が訪ねてこられて…、父が昔の本通りにしよう、２０年、３０年先を見据えた街にしようと、非常に熱意を持って呼びかけました。随分苦労しましたが」。中山などのリーダーの執念にも似た努力で１９４８年（昭和２３年）には本通りの街並みが復活した。

「広島新史～経済編～」は、…昭和２１年春ごろから、都心の本通り商店街も、つぎのように復興に着手している、として『広島原爆戦災誌』から引用している。

二十一年春ごろ、元本通り会は協同組合的精神によって、健全な明るく正しい商店街を再建する準備を進め、元安橋から八丁堀福屋百貨店至る元の商店街へ、間口四メートル・奥行き一〇メートルの小さな商店と、それに付随して１坪小店が、同じ色彩で立ちならぶ計画で、第一期二〇戸を八月六日までに、第二期七五戸を九月末までに建設することにした。

当時、広島市内唯一のデパート福屋百貨店の“復活”はさらに遅れた。

現在地の電車通り側に１９３８年（昭和１３年)、福屋百貨店新館として建設された。鉄骨鉄

筋コンクリート構造、地上８階地下２階、当時としては珍しく全館冷暖房完備、外装には淡黄色のテラコッタを貼り付けてあるなど、その豪華な建物は「白亜の殿堂」と呼ばれた。その威容を誇った建物も爆心地から７１０ｍと近く、爆風と熱風で窓は吹き飛ばされ外郭を残して全焼した。被爆直後から一か月間、２、３階を伝染病舎（当初原爆症は赤痢だと勘違いされていた）として利用された。終戦後は２階を進駐軍が接収、解除となる１９５０年（昭和２５年）まで使われた。

昭和２３年の金座街
中央奥が福屋

福屋の営業開始は１９４６年元旦、清酒の立ち飲みコーナーからだった。元旦に入社した花房才治（１９８５年当時、常務）は当時の模様をＲＣＣの特別番組「瓦礫の中から」で次のように述べている。

「…私は大八車で割り当ての酒を取りに行き、一階の一角に鉄道案内所があったんですが、そこにブリキなどで水槽を作り、焼跡から拾い集めたもので火を熾し、午後３時頃から一日４００本、牛乳瓶に酒を入れ燗をしました。」その年の２月、福屋は「営業再開」の新聞広告を出した。花房「２月２０日のオープンですね。私たちが直接仕入れたのは食料品、文房具、それから食堂もやっていましたね。あとは陶器、漆器、仏具そのほか家庭用品などですかね。なにもないですからこう台を組みましてね、その上に商品を並べて売りました。電気は八番線を引っ張りまして、そこに電燈を吊るした、というような状況でしたね」。と曲がりなりにも営業を始めたものの２階はオーストラリア兵のサロンとして接収されたほか、そのほかの階も板で間仕切りして、貸事務所として企業に貸した。後に貸事務所の立ち退き交渉が難航、福屋が本来の姿に戻るのは１９５１年（昭和２６年）のことである。

“白亜の殿堂”の復活は未だであったが、この中で大変なにぎわいを見せたのが、１９４６年５月、７階にオープンした福屋名画劇場である。戦後一気に洪水のごとく押し寄せてくる欧米文化に戦時下の“鬼畜米英”から解放された民衆は酔いしれた。名画劇場で上映されるディアナ・ダービンの「オーケストラの少女」「モロッコ」「望郷」などに熱狂した。名画劇場の経営者、水馬義輝（みづま工房社長）は当時の模様を特別番組で「トイレも仮設、階段にも窓ガラスもありませんから、寒いときには吹き曝しでしたが、お客さんは７階まで歩いて階段を上がって映画を観に来てくれました」「焼野原にぽつんと映画館ができたという感じでしたね。そこへ何十万の人が来て外国の映画を観て、青春時代の夢、感慨を持って一生涯を過ごしておられると思えば良い仕事をしたと思いますね」と語っている。

福屋は１９５４年（昭和２９年）に全館復旧工事を完了、その後１９８５年（昭和６０年）までに４回の増改築工事を行い、今日の姿になった。

１９５２年（昭和２７年）、本通り界隈の賑わいを伝える写真が「立ち上がるヒロシマ１９５２」にある。ロングスカートの女性、表情は明るい。自転車、オート三輪、進駐軍の兵士の姿も。まだアーケードはない。福屋側から金座街を南に望むとキリンビアホールが見える。最初のアーケードは１９５４年に掛けられ、１９９２年（平成２年）に架け替えられている。経済の高度成長とともに商店街の建物も木造から近代的なビルに建て替えられていった。その時間の経過とともに、原爆の傷跡も消える運命にあった。キリンビアホールは１９８９年に解体され、１９９３年にパルコに生まれ変わった。本通りのほぼ中央部にあった山口銀行本通り支店（被爆当時：大林組広島支店）は２００２年（平成１４年）に解体された。この建物は１９２３年（大正１２年）、鴻池銀行広島支店として建てられたもので小規模なもののルネッサンス様式を基本としたデザインが施され、正面の三連の飾りアーチが印象的な建物であった。

広島アンデルセン（旧帝国銀行）は爆心地から３６０ｍのところで、大きな被害を受けたが、被爆した旧館部分を保存しながら今日に至っている。しかし、アンデルセンでは創業７０周年の２０１８年（平成３０年）までに全面建て替えをすることを決定、来年（２０１６年）１月には営業を終了、解体作業に入る予定だが、「東面、北面の被爆した外壁をできるだけ保存したい」としている。（文中敬称略）

（編集委員　三宅恭次）

○広島の復興の軌跡（第１５回）～被爆７０年企画～

広島の復興に旧呉海軍工廠の「ヒト」「技術」

戦艦「大和」の模型
＊写真は筆者撮影

ＪＲ呉駅傍の呉市海事歴史科学館（愛称：大和ミュージアム）は開館して１０年、毎年１００万人の来館者がある。愛称の「大和」が示すように、この施設のシンボルは１９４１年（昭和１６年）に呉海軍工廠で造られた世界最大の戦艦「大和」の１０分の１模型である。

これを造ったのは大手造船所ではなく、呉市音戸町の、海上自衛隊の艦艇などの修理・修繕を主に行う山本造船㈱であった。大和は全長２６２ｍ、この１０分の１≒２６ｍはもはや模型ではなく実物の船、細部まで大和を再現することが求められた。特に船体全体にある微妙な丸み、木組みの甲板などは単にコンピュータによる計算では出せないものであった。精度高く再現できたのは工廠出身の職人がいたからである。大和の甲板は水はけを良くするため微妙にうねるようにカーブしている。その職人は大和で使われた台湾ヒノキの美しい木目を再現するため、タモ材を使い、４か月かけて幅１５㎜の板を一枚一枚手作業で張った。このほか大和は随所に美しい曲線があるが、これも工廠の「たたき出し」の技術で実現した。

海軍工廠は見習→職工→技手→技師の職階があり、中堅の技術者「技手」は作図、理論だけでなく現場にも精通しており、彼らが戦後、広島県はもとより日本の工業発展の大きな力になった。

１９４５年（昭和２０年）８月終戦とともに海軍工廠も解体、当時呉工廠には５万人の従業員がいたといわれている。戦後、呉工廠はアメリカのＮＢＣ造船と播磨造船所→ＩＨＩ呉工場→ジャパンマリンユナイテッド呉工場に引き継がれ今日に至っている。終戦時、従業員は引き続き呉に残った人、他の職場を求め広島県内をはじめ全国に散って行った人がいる。

東洋工業（現在のマツダ）は終戦の年、１９４５年１２月、ＧＨＱの許可を得て三輪トラック１０台を完成させ戦後のスタートを切った。当時、東洋工業の従業員は終戦時の１０分の１まで減っており、生産再開とともに熟練工を大量に雇い入れた。その主力となったのが呉の工廠出身者だった。自身も工廠出身で１９４６年まで東洋工業に勤めた藤田京郎（デルタ工業＜※＞社長）はＲＣＣの被爆４０周年特別番組「瓦礫の中から～広島経済復興史～」の中で「(戦前は多くの人が広島方面から呉工廠へ勤めに行っていたが）戦後は呉の人が海軍工廠がなくなったために、広島方面で働くという形で流れが逆流したわけです。技術的な援助という形でその一端の恩恵を受けたのが、戦後の東洋工業の姿ということはできると思います。」、「(工廠出身者はどのくらいの割合でおられたんですか？）さあ、数はかぞえたことはないですが、ああ、お前もか、というようなことでね、顔を合わすこと多かったわけですよ。」と“証言”している。

東洋工業以上に旧呉海軍工廠の「ヒト」と「技術」の恩恵を受け、閉鎖の危機を免れたのが三菱重工広島造船所（三菱広船）だった。

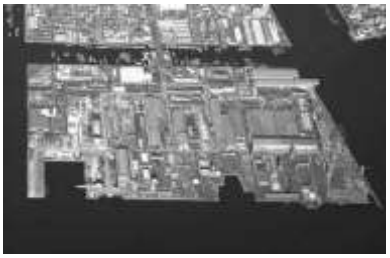
太平洋戦争の戦局急を告げる１９４３年（昭和１８年)、三菱重工は広島市の観音、江波地区の地先埋立地６０万坪（１９８万㎡）に東洋一の大造機工場の建設を目指して進出、工場建設と生産を同時にはじめ、船台をつくりながら軍艦をつくるという“離れ業”をおこなった。

１９４５年８月６日､原爆投下により工場の多くが破壊された｡東洋一の大工場の夢は消え、造船所内では「三菱広船の運命もこれまで」との空気が広がった。しかし、当時の所長、丹羽周夫（のちに社長になる）は戦時補償金３，０００万円を引出し、復興資金に充て社員に断乎、作業を続けるよう命じた。

当時技師として働いていた日高貞蔵（１９８５年当時：三菱重工プラント建設相談役）はＲＣＣの「広島経済復興史」で次のように述べている。

「みんなね、丹羽所長のもとで、一つになって再興しようじゃないか、言うならば同志的集まりになったわけですよ。残った人は工場を、広島を捨てることはできんと、空き腹を抱え、

むち打ちながら立ち上がったんですね。幸い、丁度、２００坪くらいの実習工場が屋根が飛んだくらいで残っていました。そこで、いわゆる鍋、釜っていうか、そういうものや草取り機といったものを、工場の片づけをしながら作り始めた、これが戦後のスタートだったんですね。」これらの製品は格好は悪いが、丈夫なことは天下一品であった。



三菱広船（現江波工場）

三菱広船の本格的な生産再開は終戦の年の１１月、呉工廠の技術者約２００人を雇い入れるなどして未完成のまま放置されていた戦標船「第二大雲丸」の建造からだった。しかし、東京の三菱本社は歴史も浅く伝統機種をもたない三菱広船の閉鎖を検討していた。これに対して丹羽所長は人削減を図る一方で、日本一を誇った呉海軍工廠の技術力を導入、三菱広船のレベルアップを図り、この危機を乗り切ったのである。

「海軍工廠なかりせば…」について日高は番組で次のように“証言”している。「本社で広島の閉鎖が論じられたのは、設備もない、技術者もろくすっぽいない、これはもう閉鎖した方が良いというのが本社の経営上の判断だったんですね。（丹羽所長をはじめ）三菱広船の幹部はいやあ、人もいますし、設備もありますよ、まあ、（呉工廠から）払い下げを受けるものを早め早めにリストを作って本社にアピールしとったんですよ。ですから確かに呉工廠の物的、人的遺産が三菱広船の閉鎖を救ったね、大きなウエイトを持っている、と言っても過言ではないと私は思いますね」。

戦後４０年経った１９８５年当時、観音工場には呉工廠払い下げのドイツ製の「ナイルス旋盤」が現役として動いていた。

呉工廠の「ヒト」と「技術」の助けを借りて戦後のスタートを切った東洋工業と三菱広船、しかし、そこに大きな難関が立ちはだかった。「労働争議」「エネルギー不足」そして「賠償指定」だった。

連合国側の賠償の基本方針はヤルタ協定やポツダム宣言に盛り込まれており，侵略に対する賠償取立て、日本経済の非軍事化・民主化を進めることが明記されていた。ただ、第一次大戦後のドイツへの過酷な賠償取立てが良策でなかった反省から、「金銭賠償ではなく現物賠償」「年次賠償ではなく一回賠償」とされた。

賠償問題の具体的な指針を示したのが１９４５年（昭和２０年）１２月の「ポーレ中間報告」によってであった。それは●工作機械能力の半分、●陸海軍兵器廠および航空機関係設備の全部など７項目で、日本の重化学工業の再建を阻む、実施されれば壊滅的な打撃を受ける内容であった。

戦後の日本を管理するため戦勝１１か国で設けられた極東委員会は「ポーレ報告」をもとに具体的な指定を行っていった。その目安としたのは日本の生産水準を昭和５年～９年水準に置くというものであった。

三菱広船は昭和２１年１月に、東洋工業はおよそ半分の施設・設備が２１年８月に賠償指定を受けた。賠償指定を受ければ設備の撤去、事業所の閉鎖を余儀なくされることになる。

地元の経済団体、業界団体などが指定取り消しの請願運動を行う中、世界情勢も大きく変化してきた。米ソを軸にした東西冷戦構造の顕在化である。

こうした流れの中で、対日賠償委員のストライク（米陸軍省委嘱）は「日本を強力な工業国にする方が、極東の平和と繁栄に資する」報告書をだし、賠償緩和の方向が出、最終的には昭和２４年５月、極東委員会の「マッコイ声明：平和目的の日本の生産を制限すべきでない」により事実上終止符を打った。

昭和２５年、朝鮮戦争勃発は在日米軍の兵站司令部が日本におかれ、大量の物資の買い付けが行われたことにより朝鮮特需が生まれ糸ヘン、金ヘン景気と呼ばれる好景気が招来、日本の戦後復興の起爆剤になったことは否めない事実である。

東洋工業は自動車生産に重点を置き、三菱広船は大型タンカーの受注に沸いた。こうして両社は瀬戸内工業地域における主要産業の一翼を担い、日本の戦後高度経済成長に寄与していったのである。（文中敬称略）

※デルタ工業：自動車用シートを基軸にした車内装品メーカー　　（編集委員　三宅恭次）